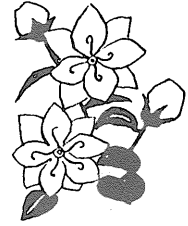


# シェリーの小切手

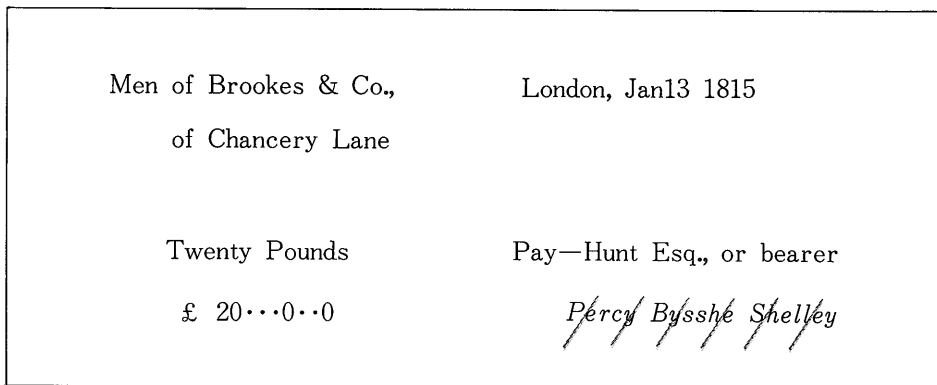
## 石原 武



国際稀覓書のフェアで、ロンドンのマッグス兄弟商会の棚にシェリー自筆の小切手を見つけた。

紅茶でもこぼしたのか隅に褐色の染みがあ

るが、ざら紙の上の文字はまぎれもないシェリーのあの流麗な、細くしなやかな書体である。それは次のように書かれていた。



「ハント様」のハントはLeigh Hunt のことであろう。その当時ハントは刑務所の中だった。周知のようにハントはかれの雑誌「エグザミナー」で、時代の権力に挑戦し、二、三度国事犯として当局によって起訴された。シェリーはオックスフォードで、この「エグザミナー」の弾劾評論を読み、「公共の福祉に生きる最も勇敢な啓蒙者の一人」（P・B・『シェリーの手紙』1811年3月2日）と共感の手紙を送っている。1812年の聖パトリックの日に行われた政治的ディナーに、恒例のリージェント王子への敬意の祝杯がは

ぶかれるという事件があった。これに対して、モーニング・ポスト紙の記者が諂いの詩を書いた。ハントはこの権力への媚に烈しく反駁した。これが当局の忌諱にふれ、ハント兄弟は1813年2月に2年の懲役とそれぞれ500ポンドの科料を言い渡され、獄舎に入った。

シェリーはこれに憤り、ハント兄弟の1000ポンドの科料を支払うため寄付運動を進めようと、友人フーカムに書いている。（N. I. White, *Shelley* p.273）シェリーは貧窮のの底にあって、やっと20ポンド寄付したらしい。

この小切手の日付、1815年1月13日の背後にはこの天才の奇妙な生活史が秘められている。

長女アイアンスイが生まれてからのシェリーとハリエットとの不和と離別についてはここでは触れない。とにかく、1813年～14年のシェリーは貧窮のどん底にいた。

「シェリー氏はサセックスに相当な不動産の権利があるが、これらは祖父、父の生涯財産であって、祖父、父の両方が生存している間は誰でもかれの困窮を救うことはできない。かれが借金の返済に〈見込みのない〉努力を続けているのはこういう次第である」と、かれの弁護士が1814年4月手紙の中に書いている。(Thomas Medwin, *The Life of P. B. Shelley* p.121)

シェリーが*Political Justice*の著者 William Godwin との関係を深め、その娘メアリーの知性にひかれていくのもこの頃である。かれの新詩集 *Queen Mab* を誰よりもかの女に読んでほしかった。赤貧の恐怖の中でかれは1年ロンドンにしがみつく。「Roslind and Helen」という詩の中で少し感傷的にかれはこう書いている。

悪しき日々<sup>に</sup>に墮落したものたちの中で  
貧乏とはどういうものか きみにはわかるね。

それは罪だ、恐怖だ 破廉恥だ。  
家もなく凍った道を着るものもなく  
彷徨うつらさ。

なによりもつらいのは 心の汚れ  
卑しい自分への侮蔑が 青春の星明りの  
微笑を涙に溺らせてしまう。

薬に頼り、死の幻覚に親しむ。ハリエットとの離婚は認められず、貧困と失った愛の地獄にさいなまれる。ハリエットとの問題は長男が生まれたこともあって、ますますこじれ、1814年の暮(12月20日)も、シェリーはハリ

エットの弁護士に脅される。秋からかれはずっと、借金取りや弁護士や執達吏の出入りに耐えていたのだった。狼のように歯をむき出した痩せた男たち。年が明けて、1815年正月2日、シェリーの窮状を案ずるメアリーの日記にはこう書かれている。

「ハリエットが借金取りたちをここに送ってくる。なんて汚い女。もう私たちはここに住んでいられない」(Dowden, *The Life of P. B. Shelley* p.465)

そして1月7日に祖父ピッシ・シェリー卿が突然に83歳の生涯を閉じたのだ。その訃報を公報で知ったシェリーは大いに喜び、1月10日、メアリーと、かの女の異母妹クララと共に、ハンス・ブレイスのハイカラな大きなアパートに移った。祖父の死は当然父が爵位を継ぎ、かれがその莫大な財産の後継者になることだった。シェリーは早速にクララと共に(メアリーは同道を望まなかったから)かれの故郷サセックスに向かった。そして懐しいわが家の前に立ったが、父の命令でその戸口を跨ぐことはできなかった。1月13日付のメアリーの日記にはこう書かれている。「シェリーとクララが着く。遺言は開けられていた。シェリーはウィットン(父の弁護士)のところにかせられる。かれの父はシェリーに故郷フィールド・ブレイスの戸口を跨せなかった。ブロックサム博士が出てきて、かれに父がとつても怒っているという。ミルトンの本に私の名前を見る。(注一シェリーはメアリーの名前が書いてあるミルトンの*Comus*〈仮面劇〉をポケットにもっていて、戸外に締め出されたとき、その本を取り出し、メアリーを思い、ミルトンの仮面劇のメロディを内なる耳で聴いていたという。)(中略)シェリーはウィットンのところに行く。かれはシェリーが財産を継げば、父の死後 100,000ポンドの収入がある筈だという。」

シェリーと父の財産協議はそれから18ヶ月も続いた。かれは倫理的な原則から莫大な財

産の相続権をもつことを潔しとしなかった。といってもこの原則もかなり限定的に理解されるべきものだったようだ。Dowden 教授によると、父や弁護士たちと協議するシェリーは目敏い実業家のように振舞ったという。要するに、これから遙か先に(父の死を待って)財産を手にし、しかもそれを子たちに残すようなことは望まない。たとえ莫大でなくても、今、金が欲しい、金の苦勞なく大いなる使命に生きたいというのがシェリーの主張であった。1815年の6月、とりあえず1000ポンドの年金(父の生存中)を受けることになった。それにそれまでのシェリーの借金(父が払うという条件がついていた。(このあと、年金とは別に総額2400ポンドの遺産が決った。))

とにかくシェリーは貧困のどん底から年金1000ポンドのオーナーになった。早速そのうちから200ポンドをずっとハリエットに送ることにした。それでシェリーの生活もある程度落ち着く筈だった。しかしハリエットとの地獄から脱けられないまま、かの女の自殺、ウェストブルック家(かの女の実家)の告訴と、惨澹たる日々が続く。♪

シェリーの小切手に戻ろう。1815年1月13日、金曜日、あのシェリーは父に拒絶されたものの弁護士から将来100,000ポンドの相続という話を聞かせられて、メアリーのもとに帰ってきた。かれの興奮と不安がメアリーの当日の日記からもうかがえる。そして、レイ・ハントへ20ポンドの小切手を書いた。興奮した心境にハントが登場したのは、いつもハントのことが気になっていたのだろうか。それにしても、20ポンドとはささやかでないか。それともハントのみならず方々に小切手を書いたのだろうか。チャンセリー通りのBrookes商会という出版社(?)宛に書かれているが、Queen Mabの出版社がたしかBrooksであったから、それと関係があるのか。もう一つの疑問はPerey Bysse Shelleyという美しい署名の上に斜めの線が幾本か走っているのだ。何故署名を抹消しようとしたのか。いろいろ想像を楽しませてくれるが、その理由に迫る手がかりはない。

シェリーの理想主義が、その地獄の現実的な生傷に満ちていたことだけはおよそ見当がつく。

### 1988年卒業生『シェリー研究』

On Queen Mab

空閑 一

Shelley and Women

溝渕 千佳

A Note on Alastor

宮内 真理

### 前号の訂正

巻頭の本田和也 ; Shelleyの 'Julian and Maddalo、に、誤植がありました。お詫し、訂正いたします。

p1左19行目 'Julian and maddalo'

右10行目 'Julian and maddalo'

12行目 Julian

13行目 Julian

いずれも Julian の誤りです。

### あとがき

本号には石川重俊先生から玉稿をいただくことができました。ささやかなレターですが皆様のご寄稿をお願いいたします。

また石川重俊氏、浦壁寿子氏からご著書を、尾崎安氏から荻田庄五郎著『シェリー研究』

(1943年研究社刊) をご寄贈いただきました。あわせて御礼申しあげます。

日本におけるシェリー文献も少しずつ集めたいと思っています。もしお手元に抜刷など残って居りましたら戴けると幸いです。(M)